

フィボ・ストラクチャーを使った日経 225 ミニ先物分析

パンローリングでは、新サービス「**Trading Toolbox**」を開始しました。これは、ウィザードブックで紹介されている優れた戦略やインジケータを、TradingView 上のインジケータやストラテジーとして使えるようにする取り組みです。

その第一弾として紹介するのが「フィボ・ストラクチャー」です。本稿では、フィボ・ストラクチャーを用いた日経 225 ミニ先物の分析例(8 月 22 日)を示し、私が長年研究・利用している「出来高プロファイル」との組み合わせについても触れたいと思います。

フィボナッチ・マーケットストラクチャー

<https://www.tradersshop.com/bin/showprod?a=3124&c=2011476000003>

フィボ・ストラクチャーとは？

フィボ・ストラクチャーは、ジョー・ディナポリ氏の「ディナポリ・レベル」をシステムティックに活用するためのツールです。



その役割を一言でまとめると、上昇トレンド中の押し目や下落トレンド中の戻りを特定し、適正な売買ポイントを見つけるためのインジケータです。

このツールは時間軸を問わず使用可能で、月足・週足・日足・日中足といったあらゆる足に対応します。今回は利用者が多い「日足」を用いて、日経 225 ミニ先物を分析してみます。

実際の分析例

■トレンドの把握

下図 1 は、日経 225 ミニ先物の日足チャートです。4 月 7 日の安値 30,625 から 8 月 19 日の高値 43,915 まで、一気に上昇した動きが確認できます。



ここにフィボ・ストラクチャーを適用すると、次図 2 のようにジグザグのライン（赤）が自動描画され、単なる一方向の上昇ではなく、適度な押し目を伴った上昇トレンドであることが明確になります。

※このジグザグラインは最大 3 本まで自動表示可能です。



■直近の動きと押し目の判定

下図 3 では直近のトレンドを抜き出しました。



- 8月4日の安値 39,730 をラベル A
- 8月19日の高値 43,935 をラベル B
とし、そこからの押し目がラベル C です。

このように、A-B-C のラベルは上昇・下落が発生すると自動表示され、現在の局面が A-B 上昇の中で、現在価格 C の押し目を探る段階であることが分かります。

■フィボナッチ比率による押し目水準

ここからディナポリ氏の代名詞である「ディナポリ・レベル」を活用します。

フィボ・ストラクチャーでは、フィボナッチ比率を自動で表示・非表示選択することが可能です。

ディナポリ・レベルでは、フィボナッチ比率 0.382 (38.2%) と 0.618 (61.8%) を押し・戻りの基準とします。今回の A-B から考えられる押し目のポイントは

- 0.382 押し → 42,330
- 0.618 押し → 41,335

つまり、浅めの押しは 42,330 付近、深めの押しは 41,335 付近が目処となります(下図 4)。



固定期間出来高プロフィールの活用

TradingView に内蔵されている「固定期間出来高プロフィール」は、チャート上の任意の 2 点を指定し、その区間における価格帯別出来高を表示するツールです。

分析対象の区間を自分で指定できるため、特定のトレンド区間に絞って出来高の厚み・薄みを検証できます。特に上昇局面や下落局面で「どの価格帯に売買が集中していたか」を調べるのに有効です。

今回、A から B の上昇区間を 2 点として適用したところ、POC(最も出来高が集中した価格)は現在価格(ラベル C)付近に位置し、フィボナッチ 0.382 の水準(42,330)と重なっていることが分かりました(図 5)。



つまり、フィボナッチ比率から見た押し目水準と実際の市場参加者の売買集中ゾーンが一致しているため、42,330 円付近は押し目としての信頼性は高いと考えられます。

さらに、この水準を割り込んでしまうと「出来高の少ない領域(42,330 から 40,500 辺り)」に入り、その間の値動きが比較的軽く、動きやすくなります。その場合、0.618 押し(41,335 円)の下まで深押しする可能性も十分に考慮すべきでしょう。

まとめ

- フィボ・ストラクチャーはトレンド中の押し目・戻りを特定し、売買の適正水準を示すインジケーター。
- フィボナッチ比率は自動で表示・非表示を選択可能で、0.382 と 0.618 を基準とする。
- 固定期間出来高プロファイルを使うと、トレンド区間内で出来高が集中した価格(POC)を把握できる。
- 今回はその POC がフィボナッチ比率 0.382 と一致し、押し目の信頼度を高める要因となった。

本稿では、フィボ・ストラクチャーの基本的な使い方と、出来高プロファイルを組み合わせた補助的な応用例を紹介しました。

フィボ・ストラクチャーにはさらに多くの活用方法があります。他のインジケーターや異なる時間軸との併用により、より精度の高い分析が可能です。

次回以降のレポートでも、より実践的な使い方を紹介していきます。

(以上)